

<県研究主題>

具体的な活動や体験を通して気付きの質を高める学習活動を充実し、生活科学習の特質を生かした学習指導と評価の工夫・改善

提案1

提案者 木村 弘子(県西地区)

<研究主題>

接続期に大切にしたい5つの視点を意識した生活科の実践
～スタートカリキュラムを活用した合科的・関連的な指導の工夫～

1 提案内容

接続期にある児童がスムーズに小学校へ順応していくためには、画一的な時間割を当てはめるのではなく、実態に合わせた柔軟な時間割や教員の意識が必要であると考えた。生活科を中心に、他教科・領域を関連づけ、総合的に学習活動を進めることで、幼稚園・保育所とのなめらかな接続ができると考え、本研究に取り組んだ。

(1) テーマについて

同じ学校でも児童の様子は年によって様々だが、どの児童も期待と不安を胸に新しい環境に一生懸命なじもうとしている。一人ひとりの笑顔と居場所づくりのために指導・支援の基となるスタートカリキュラムは有効な手立てになると考えた。

(2) テーマに迫るための手立て

① 幼稚園・保育園をつなぐ～幼保・小の連携という視点から～

土台となるカリキュラムを作成するための5つの視点

- ア 子どもたちの小学校への期待感を持ち続けられるようにする
- イ 子どもの主体性など、今まで育まれてきたことを大切にする
- ウ 実態に応じた適度な段差をふまえる
- エ 友達や先生との関わりを大切にする
- オ 環境面(人的・物的環境)のちがいの対応

② 合科的・関連的な指導の充実

接続期にある児童の登校意欲や学習意欲を高める指導の工夫を意識した大単元を設定した。さらに、一見遊びと感ずることも、学習目標を明確にし、計画的に単元構成することで有効なスタートカリキュラムの一つとなるのではないかと考え、実践した。

③ 授業時数の適切な割り振りへの配慮

モジュールを取り入れ、単位時間を柔軟に考えてカリキュラムを計画する。

④ 学習環境の工夫

ゆったりした時間や指導体制、児童にわかりやすい表示、栄養士・学校図書館司書・給食ボランティア・6年生の協力、合科的・関連的な指導などを進め、モジュールで授業内容を組み立て、徐々に児童が1コマ45分を意識できるようにし、各教科の目標も効率的に達成していこうと考えた。

(3) 成果と今後の課題

① 成果

- ア 2年間を通し、学年全体でスタートカリキュラムに取り組んだことで、共通理解をもって接続期の1年生の指導にあたることができた。
- イ 1時間目に「きらりタイム」を実施することで、児童の緊張をほぐし、落ち着いて学習に取り組み、「小学校って楽しい」と感じさせることができた。
- ウ 合科的・関連的な学習により、ゆとりのある時間設定をすることができ、児童が課題や活動の仕方を理解し、意欲的に授業に参加することができた。
- エ 大単元内の様々な学習を通して、「かかわる力」と「自立の力」が児童につき、学校生活に安心感と自信を持たせることができたと考えられる。
- オ スタートカリキュラムを行うことによって、小学校生活に適応していない子どもだけでなく、全ての子どもに、より良い姿が見られた。

② 今後の課題

- ア スタートカリキュラムの作成と活用のために
 - ・幼保・小の連携や職員間の打ち合わせなどの時間の確保が難しい。
 - ・一つの小学校に入学する複数の園の特色や経験の違いを把握する。
 - ・全職員のカリキュラムへの共通理解を必要とする。
- イ 合科的・関連的な指導のために
 - ・各教科の目標を見据えることが重要であるが、時数の計上が難しい。

2 協議内容

(1) 導入する際の注意点

学年間でスタートカリキュラムについて共通理解をし、修正しつつ、教育課程として取り組んでいった。学校全体で取り組んでいくことが大事である。

(2) モジュールを組み立てる上での難しさ

これまで行ってきた実践をスタートカリキュラムに組み込むことでわかりやすく進めることができた。しかし、各教科の目標を明確にすることは難しい。

(3) 合科で行った際の評価の工夫改善

1時間で全員を見取るのではなく、クラスを三つに分けることで、1週間で全員を見取ることができた。

3 まとめ ～指導・助言より～

- スタートカリキュラムを実施するには、管理職の意思決定が必要である。
- 学年内で1週間ごとのねらいをもつことで、教員の支援の仕方が充実する。
- スタートカリキュラムは学校全体で考えることがとても大切である。
- 保護者の協力を得る上では、このように育てたいから、ここを手伝ってほしいということを発信していくことが大切である。
- スタートカリキュラムは支援を必要とする児童への支援ではなく、全ての子どもたちにどのような指導が必要になるのかを考えることが大切である。

<研究主題>

考える力を育む学習活動の創造 ～子どもが主体的に取り組む授業づくり～

1 提案内容

(1) 研究の視点

1 一人ひとりの子どもが思いや願いをもち、夢中になって取り組む学習活動

学習活動が主体的なものとなるためには、体験や活動を通して関わる対象に対し、興味関心をもてることが大切である。また、一人ひとりの子どもが思いや願いをもち、活動に没頭することで自ずと集中して考え、大切な事に気付く。そこで生まれた気付きは、より質の高いものだと考える。

2 かかわることの楽しさが分かり、自分の思いや気付いたことを進んで伝えようとする学習活動

気付きの質を高めるためには、体験活動と表現活動の相互作用が大切である。言語活動を充実させることで思考を促し、他者とのコミュニケーションを成立させ、思いを交流して認め合い、振り返って捉え直すことができると思う。また、活動や体験を言葉によって振り返ることで、無自覚だった気付きが明確になり、それぞれの気付きを関連付けることが可能になる。児童は表現することで、活動や対象を見つめ直し、周りや過去の事と比べて気付きの質を高めていく。体験や活動の振り返りが、子ども達にとって必然性のあるものになるような工夫が大切である。

(2) 授業実践

単元名「なつとともだち」(全8時間扱い)

小単元名①	時数	小単元名②	時数
みずとあそぼう	4時間	ひかりであそぼう	4時間

① 活動の実際

1 一人ひとりの子どもが思いや願いをもち、夢中になって取り組む学習活動

- ・日常の中の季節の変化を感じられるようにする (単元前)
子ども達が季節の移り変わりを感じることをねらいとするために、教員側は意図的に水で遊ぶ活動を入れた。子ども達は、アサガオの水やりから偶発的に水遊びを楽しむ経験をしたことで、その時に思いついたことが夢中な活動へと繋がった。
- ・自然の流れで子ども達が水と楽しめる場の設定をする
アサガオの水やりを体験し、子ども達は水の冷たさや気持ち良さを感じていた。そこで、体育で汗をかけた後に、「みずあそび」を行った。教員が様々な道具を準備したことで、子ども達の水遊びの楽しみ方が広がり、様々な体験によって気付きの幅も広がった。
- ・体験活動へ繋がる環境づくりをする

「なつとともだち」の単元に入った頃から、教員は意図的にビーズやスパンコールを教室の窓際に置いた。子ども達は、対象に触れることで会話が生まれていく。水遊びの時の虹が見えたという経験から、水と光の関係への思いが膨らみ、光と遊ぶ活動を見い出した。

2 関わることの楽しさが分かり、自分の思いや気付いたことを進んで伝えようとする学習活動

- ・友達の活動に気付くために体験活動の画像を用いる
水遊びをした後の気持ちを思い出せるように、活動時の写真を見て振り返った。気付いた事を発表する場を設けた結果、一人ひとりの気付きをクラス全体で共有する事ができた。友達の活動の様子にも気付き、遊びに広がりが見え、新たな遊びへの思いが高まった。

- ・意欲的な活動にするための工夫をする

振り返りの時に使用した写真を教室のドア（子どもたちの目に触れる所）に掲示する事で、休み時間などに写真を見ながら子ども達が交流する様子が見られた。自分で新たに水や光の遊びを発見し、友達と一緒に遊ぶ事を楽しむなど、意欲的な姿が見られた。

② 成果と課題

<成果>導入を工夫し、体験と体験を繋ぐ表現活動を意図的に設定したことで、一度経験した遊びから発展的な楽しみ方を見付け、友達の遊びに挑戦したいという思いが高まった。また、体験と体験を繋ぐ表現活動を適切に設定することで、気付きの質の高まりを感じることができた。

<課題> 活動が天候に左右されるので、活動場所を選んでおく必要があった。もう一つは、聞く・話す力がまだ十分でない1年生は、担任が間に入って話を進めたり、板書をして話し合いの様子をまとめたりするなど、子ども達自身が視覚的に実感できるようにすることが大切である。

(3) 協議内容

- ・子ども達が生き生きとした発表であった。体験が次に繋がっているのが素敵であった。
- ・子ども達のどのような姿を見取るのか?⇒例えば、朝の水やりの様子など、授業以外の場でも日常の姿を見取る必要がある。以前の子供達と比べて違うという姿を見取っていく。
- ・教員は能動的に働きかけていた。教員は子ども達にどのような言葉がけをしていたのか?⇒以下の5つが子どもの思考を促す言葉がけである。①児童の気付きに共感する言葉がけ ②無自覚な気付きを自覚させる言葉がけ ③今までの学習を想起させる投げかけ ④新しい問いが生まれるような言葉がけ ⑤次の活動の方向性を示す言葉がけ
- ・表現活動の流れを教えてほしい。⇒写真に吹き出しを貼り、振り返りの活動を入れた。七夕の短冊にも触れた。次にやりたい活動についてプリントに書かせる活動（記入は言葉だけでも絵だけでも良い）を入れた。ペアで話す相談タイムを設定した。

(4) まとめ

- ① 単元の中に、体験活動と表現活動を教員が意図して入れていくことが大事である。ただ単に、体験活動と表現活動を位置づけていくわけではなく、教員の陰ながらの位置づけが大切である。
- ② だれもが通る入り口のドアに写真を掲示したので、‘しかけ’が見事であった。
- ③ 生活科の評価は、結果に至るまでの過程を重視している。評価規準を設けないと、成果物だけの評価になってしまう。1時間の授業の中で、教員一人で全ての児童を見取することは難しい。学年をチームとして多くの目で子ども達を見取ることにより、評価の偏りがなくなっていく。

2 協議の柱（子どもの姿を適切に見取り、気付きの質を高める指導の工夫）に即した協議

(1) 評価の手立て

ビデオで児童の活動やつぶやきを記録し、学年で情報交換することで見取りを深めていく。

(2) 気付きの質を高めるために

気付きの質を高めるためには体験活動の時間を保証し、明確な目標をもって声かけする事が重要である。また、児童に尊敬の念をもち、広い視野と子ども同士の関わりを見る目が必要である。

(3) まとめ

- ・生活科の評価は、長い目（単元全体を通して児童の変容や成長を見取る）と広い目（学年チームや様々な立場の人達で見取る）で見ることが大切である。
- ・気付きの質を高めるためには、体験活動と表現活動の相互作用が大切である